

---

# 高校教師

登

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

高校教師

### 【Nコード】

N1854A

### 【作者名】

登

### 【あらすじ】

作者登の高校時代の恋の実話。当時25歳だった英語の先生に、私は恋をした。いろんな形でアピールし続け、先生とたくさんの想い出を残した。登と先生の恋の行方は…？

## プロローグ（前書き）

この物語は、ノンフィクションです。尚、登場する人物名は、仮名を使用しています。

作者はプロではないので、日本語としておかしな表現がいくつかあるかもしれませんが。

高校時代の実話なので、思い出しながら執筆しています。

なるべく早く完結させたいと思っておりますが、自分のペースで書いているので、更新が遅くなることもございます。

感想を戴けたら励みになり、更新スピードもあがるかもしれません。作者は心の病気を持っている為、批判はご遠慮願います。

アドバイス等は歓迎です。

上記のことを御理解の上、閲覧ください。

## プロローグ

私の高校時代の恋のお話です。私が好きになった相手は、先生でした…

出会いは高校2年の冬だった。

クラブが終わった後、友人が英語のプリントをもらいに行くというので、私も職員室までついて行った。

その英語の先生は、2年の途中から産休の先生の代わりに、臨時の講師として来ている人だった。

友人は、先生のことをめっちゃめっちゃ批判していた。

「分かりにくい！」

他の生徒も同じように、先生の教え方に不満をもっているようだった。

だから私は、あまりいいイメージを持っておらず、一度どんな人か見てみたいなあ位の気持ちで待っていた。

友人が先生を呼ぶと、背が高く細い、眼鏡をかけた人が出てきた。私が、「この人かあ。」と思っていると、先生は言葉を発した。

次の瞬間、私の中で何かのスイッチが押されたようだった。

先生の声は、見た目とかなりギャップのあるスピッツのvocalみたいな声で、私にとってなぜか衝撃的だった。

私は帰り道で友人に、

「あの声何い〜（笑）きもいつてえ！」

と言っていた。もちろんそんなこと思っていなかった。

ただ、テンションの上がっている自分を隠そうと、そんな嘘を言ってしまうのかもしれない。

……こうして、私は先生を知った。

あまりのインパクトの強さに、私は自然と先生を目で追うようになっていった。

恋心を抱くのに、その時間は必要なかった。

## 第1話・失恋と結婚

先生の名前は永坂久也（仮名）。当時25歳だった。

永坂先生の存在を知ってから全校集会などでは必ず、先生の姿を探すようになった。

もちろんこの時はまだ、ただ気になる存在というだけで、恋なんて気持ちはなかった。多分ね…

この時もう、2年も終わろうとしていた。

3年か…。あつという間の高校生活だった気がする。

私は中学の時ずっと好きな先生がいた。（別に先生好きってワケじゃない…）

吹奏楽部に入っていた私は、顧問の先生を好きになってしまったのだ。

高校に入ってからその気持ちは変わらず、とうとう2年の時告白した。

先生は当時彼女はいないと言っていた。

クラブ一筋で、彼女いそうにもなかったので、誰もが疑いを持たなかった。

けれど、先生は嘘をついていたのだ。

大学の頃からずっと付き合っている彼女がいると、私に教えてくれた。

正直、ショックだった。

しばらくして、友人からもっとショックな知らせがきた。

先生が、結婚すると。

急なことで、私はどうしたらいいか分からなくなってしまった。

私はひたすら、泣き続けるしかなかった。

しばらくして、OGで先生に結婚おめでとうと言いに行くことになった。

私は行くか迷ったが、今行かなきゃ先生に会いにくくなると思い、

頑張っ て行くことにした。

そして先生の目を見て、

「おめでとう」と言うことが出来た瞬間、何かがふっきれた。

そんな時、永坂先生に出会ったのだ。

## 第2話・はじめての授業

私は、3年生になった。

みんな誰と同じクラスになるかソワソワしている。

理系だった私のクラスは、1組しかない為、クラス替えなどはない。私の気になることと言えば、英語の担当が誰かということだけだった。

ドキドキしながら、教室の後ろに教科担当表を見に行った。

ドキドキ ドキドキ ドキドキ ドキドキ…

………いたっ！

英語の欄に永坂先生の名前があった！めっちゃめっちゃうれしくて、普通にしているのがかなり辛かった。

授業の日が待ち遠しかった。先生の授業は、週三回。理系なので少ない。

初めての先生の授業、私は数学の課題をしていた。

先生は軽い自己紹介をし、雑談を始めた。

数学をやってるふりをして、私はすっかり先生の話聞いていた。

先生のペンケースには、かなりでかい羊のぬいぐるみキーホルダーがついていた。

そのことを男子達（うちのクラスは男子30名女子8名）にいじられていた。

理由は、動物占いが羊だからだそうだ（笑）。

そんな先生を、めっちゃめっちゃかわいいと思った。

先生の一言一言に、私はドキドキしていた。

永坂先生は、少し女っぽい仕草をする。

歩き方は足を交差させるし、話し方もクネクネしている。

そんなところが、男子にいじられる要因なのだろう。

前任校では帰る時、男子に校門で囲まれたりしていたそうだ。

男子

「先生、携帯教えてやあ」

先生

「なんでえ？」

男子

「教えな帰さへんで」

先生

「そんなんしてんと早よ門から降りい。」

と、先生はちよい悪の男子達を優しくなだめたと言う。

そんなやりとりを続けていると、その悪達に先生は認められられしく、

男子

「先生話分かるなあ！」

みたいな感じになったそうだ。

結局番号は教えたらしい。

この出来事が後々、私が苦勞する原因になるのだが…。

### 第3話・最初の失敗、そして接近

先生は話の途中、

永坂

「まっ、数学してる子もおるけどなっ」

と言った。間違いないく私のことだ。先生と目が合う。

心の中で、

登『違うよ、違うよ！ちゃんと聞いてるよ！ただ、照れてるだけだよ！』

と叫んでいた。

最初の授業は、失敗に終わったようだ…。

授業後、私は先生のことを好きになり始めている自分に気づいた。心臓は、まだドキドキしている。

頭の中で否定しても、心は正直だ。本当の気持ちは隠せない。

それから私は、どんどん先生に惹かれていった。

先生と仲良くなる為にはどうすればいいか考えた。

授業回数は他のクラスより少ない。授業以外で、先生に接近するしかないと思っった。

この考えは、正しかったのだろうか？

今思うと、正しかったと言える自信があまりない。

そう、私は、先生に近づきすぎてしまったのだ…。

後日、先生に自分の存在をしつかりと覚えてもらおう為に、私は放課後職員室に行った。

英検のことを質問するという口実を作り、友達と先生の机に向かう。まずは自己紹介。緊張して、やたらとテンションが高くなる…。

何度も名前を連呼して、早く覚えてもらおうとした。

かなりあやしい言動だった。

それから、休み時間や放課後を利用して、ことあるごとに永坂先

生のところに行くようになった。

最初は緊張してうまく話せなかったけど、話していくうちに共通点が多いことを知り、すぐに仲良くなった。

いろんな話をした。先生は、前任校での話もしてくれた。

前にも書いた、門で先生を囲んだ悪達の中の一人が先生を気に入ららしく、先生の携帯によくメールや電話をくれたのだという話もした。

彼の家は色々な事情を抱えた家で、それもあってか、彼は先生に依存していった。

このままではいけないと思った先生は、もう電話もメールもしてはいけないと言った。

裏切られたと感じた彼は、先生にイタ電をかけるようになった。

そんなことがあったので、先生は生徒には携帯を教えないと決めているのだ。

こんな話もしてくれた。

ある日の授業中、とある男子生徒が携帯で電話をしてうるさかったので、先生は優しく、

永坂

「それなおそうか？」

と言った。すると彼は立ち上がり、先生を殴ろうとした。ぎりのところ寸止めし、

生徒

「こいつびびつとんでえ！」

と言った。それから先生は、精神的にかなり追い詰められ、買い物依存症や過呼吸になったのだそうだ。今は治ったらしいが、

もっと先生を知りたくなった。

## 第4話・告白

それからすぐ、私は先生に告白をすることにした。  
あれは5月だったろうか？

永坂先生への気持ちを確信した私は、少しでも先生に特別に見てほしくて、自分の気持ちを伝えることにした。

もちろんいい答えなど期待していない。

先生にとって私は一生徒でしかないのは分かりきっている。

しかし、告白すれば少しは特別視してもらえるかもしれない。これは告白するしかないだろう。

だが、いざ告白となるとなかなか勇気が出ないもの。

少し部活が早く終わった私は、友人の優子に相談することにした。

以前から先生への想いは優子に伝えていたが、告白すべきかどうか第三者の意見を聞こうと思ったのだ。

帰り道の公園で、私達は話をした。

優子

「もう登の中で気持ちは固まってるんやろ？」

登

「うん。」

優子

「じゃあ言うしかないよ！！」

登

「…今から、言いに行こうかな？」

優子

「それやったら行こう！」

色々話して私達は学校に戻ることにした。

職員室前で、私はなかなか前に踏み出せずにいた。ドアが開けられない…。

そんな私を見て、優子が私の背中を押す一言を言った。

優子

「今ここを開けないとなんにも始まりへんで！！ここから始めないと！！！」

私は思い切ってドアを開けた。

先生は自分の席に座っている。

登

「先生、ちょっと来て！」

永坂

「ん？何？」

登

「いいから来て来て！」

周りの先生が不思議そうな目で見る中、私と先生は職員室を出た。

先生はずっと、何？何？と言っている。

誰にも見られないように、私は二階の廊下に先生を連れて行った。

6時頃だったろうか、辺りは薄暗くなっていた。

永坂

「何？どうしたん？」

登

「ん．．．あんな．．．えっと．．．。」

なかなかうまく言葉が出ない。

私をもたもたしていると、教室に電気がついていることに気付いた。

誰かいる。

これはまずいと、急いで近くの教室に入った。

薄暗い教室に、先生と私二人。静かな空気が流れる。勇気を出して、

私は口を開いた。

登

「急にごめんな．．．あんな．．．ん．．．先生のことが、

．．好き．．．です。」

やっと言えた。心臓は今にも爆発しそうだ。先生はキョトンとしている。

登

「びつくりした？」

永坂

「うん．．．。」

登

「気付かんかった？」

永坂

「うん。全然分からなかった。なんか見せたいものでもあるのかなあと思ったわあ。」

登

「えー！絶対気付かれてると思ってた。だって、毎日先生んところ行ってたやん。」

永坂

「でも分からんかったわあ。」

そして先生は、私の告白に対しての返事をしてくれた。

永坂

「ん．．．、僕と君は教師と生徒やんか？だから、そういう風には思われへんわ。」

この返事は予想していた。なんせ私は、一度中学の先生に告白している。

登

「そう言うと思った。」

永坂

「それに多分、それは一時的な感情やで。まわりにいっぱいおるやん。僕オツサンやで。」

登

「それも言うと思った。」  
先生は笑った。

永坂

「なんか、見透かされてるなあ（笑）」

登

「うん。お見通しやで！」

ふられているのに、なんだか幸せな時間だった。

登

「彼女は・・・おるの？」

永坂

「彼女はおらんけど、仲のいい人はおるよ。実習で一緒やった人。」  
多分、先生はその人のことが好きなんやろうなあ、と感じた。少しシヨックだった。

それから先生は、自分の恋の話をしてくれた。

大学の時の淡い恋の話。

一回生の時、四回生の人と付き合ってた話。

1時間以上話していただろうか。辺りはすっかり暗くなっていた。

永坂

「前の学校におった同い年の先生がな、生徒と付き合ってたんよ。なんかな、教師と生徒って対等な立場じゃないやろ？」

教師は自分のいい部分しか見せへん。

職権乱用な感じがして、その時僕は絶対生徒とは付き合わへんって決めてん。」

登

「そっか・・・。元生徒も？」

永坂

「うん。元生徒も。」

登

「絶対ない？」

永坂

「絶対とは言いきられへんけど。」

登

「じゃあ、頑張る！私はなかなか諦めへんで  
我ながらなんとプラス思考な発言」

先生は笑っていた。”ガラッ”

ドアが開いた。そこには教頭先生が立っている。

登「え〜っ!!」

私は心の中で叫んだ。

電気もついていない真つ暗な教室。教師と生徒二人きり。

なんともあやしいシチュエーション。

まずったと思った。

永坂

「ちよつと話があつたんで。もう帰ります。」

先生がなんとかごまかしてくれた。

永坂

「遅くまでごめんな。氣い付けて帰りや。」

私が呼び出したのに、先生が謝ってくれた。

本当に優しい。

玄関まで送ってもらって先生と別れた。

## 第5話・進展

先生と話すのが楽しくて、私はほとんど学校を欠席しなくなった。次第に欲が出てきた。自分だけが特別になりたいと思うようになったのだ。

メアドを知りたい。先生とメールがしたい。だけど前任校での話を聞いて、携帯教えてと気軽に言えるわけがない……。

登

「いいこと思いついた！」  
名案が浮かんだ。

英語の試験の点がよかったら、ご褒美にメアド教えてもらおう約束をしよう！

思いついたら吉日、私はすぐに先生のもとに向かった。

先生は承諾してくれた。

先生の思う合格点を探ったら携帯番号とメールアドレスを教えてもらえることになった。

私はめっちゃめっちゃ勉強した。英語ばかり集中的に。

試験が始まった。

登

「……………」  
難しい！応用問題が難しすぎる！

教科書からの問題は、勉強の甲斐あってなんなくこなせたが、教科書外からの応用問題がめっちゃめっちゃ難しかったのだ。

90点台を目指していた私は、焦った。

応用問題だけで20点位ある。なんとか頭をフル回転して、試験用紙の空欄をうめた。

一つだけどうしても思い浮かばなかった欄があったので、人がいってして絵を描いてやった。

そんな感じで試験も終わり、私は次の日授業が終わると、一目散に職員室へと向かった。

登

「先生、採点もう終わってる?」

私は聞いた。

永坂

「終わってるよ。」

そう言うと先生は、引き出しから試験用紙を取り出した。

私の試験用紙を探し、

永坂

「はいつ。」

緊張の一瞬だ……。

” 86点”

私がいって描いた絵には、赤ペンで

”(笑)”

と書かれてあった。

微妙だ。実に微妙な点だ。

私は勇気を出して、先生にこう聞いた。

登

「これ…、合格点?」

すると先生は軽くからかった感じで、

永坂

「さあ、どうやる?」

と言った。

登『なに〜!どっちやねん!このリアクションはダメと考えるべき  
なんかあ!!--!--!』

心の中で叫んだ。

登

「それは…ダメってこと？」

登、よく頑張って聞いた！

永坂

「うーん…どうやるなあ（含笑）」

せつかく頑張って聞いたのに、またはぐらかされたあ！！

そんなやりとりをしばらくした後、諦め半分でいつものように色々な話をした。

パンの歌の話とか（なんやそれ）。

ふと時計を見たら、7時になっていた。

7時を過ぎると永坂先生は帰りなさいとうるさい。

なのにこの日は、なんだかいつもより優しい。

永坂

「もう7時かあ…。」

先生はおもむろに引き出しを開け、メモ帳を取り出した。

登

「あつ、それ前くれたピングーのメモ帳やん。」

私はいすに座り、くるくる回りながら言った。

そのメモ帳は、以前英語のことで友人と質問して聞いたこと、後になって訂正したことを書いて私達にくれたものだった。

永坂

「最後の1枚やあ。」

ビリっ。

先生がメモ帳を破る音が聞こえた。

永坂

「はいっ。」

先生はその最後の1枚のメモ用紙を、私に手渡した。

登

「くれるん？やったあ！！」

まだいすでくるくる回っていた私は、ただメモ用紙をもらえたと思っ  
て、くるくる回りながら喜んだ。

登

「ん！？……」

私は異変に気付いた。

## 第6話・優しく、意地悪な先生

メモ用紙には何か文字が書かれていた。

登

「!!!!!!」

先生の番号とメアドだ！

私は思わず叫びそうになった。

すると先生が分かっていたかのように、

永坂

「叫ぶなよ！」

と、私を制した。

登

「うん。。」

私は慌てて手で口をおさえた。周りにはまだ先生が大勢いる。

私は信じられなかった。先生は予め、番号とメアドを書いていたのだ。

そのくせ教えてくれないような素振りを見せてじらしやがってえ！！しかもこんな演出まで！！

先生はちよつと楽しんでる感じがした。

私、からかわれてるのかなあ？

どっちにせよ、番号とメアドをGETしたのだからよしとしよう！

先生に負担をかけないように、

「返事はいらさないよ」  
と言った。

そう言うことで、私の気持ちも少し楽になった。

だって、メールを送って返事がなかったらへこんだりしてしまうから、はじめから返事がないと分かっていた方がよいと思ったのだ。

私の性格上、期待しすぎて返信がなかった場合、ペしゃんに潰れてしまう危険性がかなり高い。

一言で言えば、ただの弱虫。けれど、メアドを交換出来ただけで、十分幸せだった。

この日先生は、玄関まで私を見送ってくれた。職員室から玄関までの道のりは、とつても幸せだった。そう、まるで恋人にでもなった気分だ。

このままずっと廊下が続けばいいのに…。

先生は優しい。けれども意地悪だ。

そんな先生の性格がよく表れた出来事だった。

## 第7話・欲望

番号とメールアドレスをGETした私は、毎日メールを送りたい気持ちを必死に我慢した。本当は毎日送りたい。

だけど先生に迷惑はかけたくない。

その分、時間があれば先生に会いに行った。それこそ、休み時間や移動の合間にも。

私が職員室のドアを開けると、みんなが永坂先生の顔を見る位、私は常連様になっていた。

ある時優子が、友人と職員室にやって来て、私と永坂先生が話しているのを見た。

すると隣りにいた優子の友人は、

友人

「あの二人って付き合ってるん？」

と聞いたそうだ。

なんともうれしい反応

だがその反面、周りにはそういう風に見えるのかとちょっと焦った。

先生に迷惑かけないつもりが、しっかりかけてしまっている……。

だからと言って、そこで会いに行くのを自粛できるほど、その頃の私は大人じゃなかった。

ガキだった。

先生に会いたい。話したい。もっと私を知ってほしい。

自分の欲望だけが先走っていた。

どこにいても、何をしても先生のことばかり考えてしまう。

今ほどの教室にいるから次の移動である廊下を通ろう、とか。  
なんかストーリーカーみたい

先生には、結構ファンがいた。

ファンと言うより、本気で好きっぽい子が何人が先生と話している  
のを何度か見かけた。

ジェラシーだ。

もちろん、他の誰よりも一番仲がいい自信はあったけれど、先生を  
独り占めしたかった。

誰にもとられたくなかった。

本気で好きだったから。

今思えば、おもちゃを欲しがる子どもと同じだ。

まったく、私は子どもだった。

## 第8話・興味？

梅雨も終わり、季節は暑い夏になろうとしていた。

私は毎日授業が終わると、一目散に音楽室のある4階へと向かった。

なぜなら、先生は音楽室の近くにある男子トイレの掃除監督をしていたからだ。

掃除当番の子が集まるまでの間、少し先生と話が出来る。

クラブの前に先生と話せると、それだけで練習もうまくいったりした。

HRが終わるのが遅いと、掃除が終わって先生は職員室に戻ってしまふ。

この日も、いつものように先生のもとへと急いだ。  
いた！

まだ掃除当番の子達は来ていないようだ。

登

「まだ集まってないのん？」

永坂

「うん。今からクラブ？」

登

「そやで！もうすぐコンクールやし、頑張らんと！」

いつものように何気ない会話をした後、副部長なので色々準備することもあり、私は音楽室に向かった。

荷物を置き、色々と準備をしていると、誰かが声をかけてきた。

「ここでやってるんかあ〜。」

先生だ！

私はすごくうれしかった。

いつも行動を起こすのは私の方で、まさか先生から来てくれるなんて思ってもみなかった。

登

「うん、そうやで いつもここでやってるから暇やったら見に来てな！」

どうやらまだ掃除当番の子達が来ないみたいで、ひよっこりと音楽室に顔を出してくれたようだ。

すごく些細なことに思えるかもしれないが、この時の私にとって、地球がひっくり返ったんじゃないかと思う位びっくりする出来事だったのだ。

先生が、少しは私に興味を持ってくれたってことかな？  
プラス思考な私はそう感じていた。

## 第9話・レンタルとプレゼント

ある日私は、先生のファンの子が先生にCDを貸しているのを目撃した。

これは私もうかつかしてはいられないと、当時気に入っていたA J I C O のアルバムを先生に貸してあげた。

先生はあんまり興味なさそうだったけど…（^ー^；）

こんなこともあった。

ゴールデンウィークに入る前、私は先生に本を貸した。三代目魚武の本だ。

あまり本を読まない私も、一気に読んでしまうほど面白い本だったので、是非先生にも読んでほしいと思ったのだ。

同じ本を読むことで、先生との距離を縮めたかったのかもしれない。先生は、

「面白そう。」

と言ってうれしそうに本を受け取ってくれた。

先生は私の友人が所属するバドミントン部の顧問をしていた。顧問と言っても名前だけが。

友人には先生に本を貸したことを話していた。

ゴールデンウィーク中に試合があったようで、試合会場で先生が終始その本を持ち歩き読んでいたことを、友人が教えてくれた。

私はとても嬉しかった。

先生は、ちゃんと読んでくれてたんだ。

ゴールデンウィークも終わり、早速先生の授業があった。授業終了後、先生に本のことを聞いてみた。

登

「先生、魚武読んだ？」

永坂

「ああ、読んだよ。面白かったわ！」

ちょっと待って。本持ってくるわ。」

そう言つと、先生は職員室までわざわざ本を取りに行つてくれた。

永坂

「はい。長い間ありがとうな。」

そう言われて嬉しかった反面、先生との繋がりが一つなくなった気がして、少し寂しかった。

その日の放課後、珍しく先生から職員室においてのお誘いがあった。

ウキウキ気分で先生のもとへ行くと、先生はゴールデンウィーク中の話を始めた。

先生には姉と弟がいるのだが、親戚の法事があり、その合間に姉弟で海を散歩したらしい。

「姉弟仲いいんやね！」

私がそう言つと、先生は少し照れながら、

「はい。おみやげ。」

と、きれいな貝殻を私の手に置いた。

「えー!!!!!!」

私は目をまん丸にして驚いた。

「その時に見つけたから。」

先生が、また照れながら言った。

「これ、私の為に拾つてくれたん？」

調子に乗つて、こんな質問を試してみた。

すると、先生は、

「まあね。たいしたもんじゃないけど。綺麗やったから。」

と言つた。

登

「うれしいよ！買った物とかよりもうれしい！ずっと大事にするね」

永坂

「大袈裟な（笑）」

登

「ちつとも大袈裟じゃないよ。だって、先生にもらった初めての物やもん！大事にする！」

そう熱く語る私を、先生はうれしそうに笑いながら見ていた。

そんな小さな幸せが色々あった前期（私の高校は2期生）の半分はあつという間に過ぎて、早くも夏休みに突入した。

普通ならうれしいはずの夏休みだが、受験勉強プラス先生に会えないというもあり、憂鬱な夏休み……のはずだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1854a/>

---

高校教師

2010年10月21日20時37分発行